

アイザック・シンガーの神概念

永幡 可奈子

はじめに

イディッシュ語作家アイザック・バシェヴィス・シンガー (Isaac Bashevis Singer, 1902-1991) は、独自の宗教観を持ち、それが作品に大きくあらわれている。これは、第二次世界大戦中に、多くのユダヤ人が経験したホロコーストの与えた影響が大きい。ユダヤ人社会には、他のユダヤ人作家も描くように、宗教的で真摯に生きる貧しい人々に満ちていたことを前提にしなければならないという不文律があったり、ホロコースト時代にユダヤ人を見殺しにしたポーランド人を否定的に描く傾向があったりするが、シンガーは、それらのきまりや傾向に反しており、作品の中では特殊な環境下にある人物の個性を描出することに重きを置いている。ユダヤ人コミュニティを強調するということをしていないために、シンガーは、イディッシュ語世界やイディッシュ語作家の間では批判の対象であった。このように、シンガーはユダヤの文化や伝統を持ちながらも、それらにとらわれることなく、独自の概念を貫く作家である。ユダヤ人の経験した歴史的な出来事などもふまえて作品を読み解き、シンガーの宗教概念にせまる。

1. 『メシュガー』の主人公アーロン・グレイディングーにみられる シンガーの考え

『メシュガー』(Meshugah, 1994, イディッシュ語原作 *Lost Souls* (1981-83) に『フォワード紙』に連載)の主人公であるアーロン・グレイディングー (Aaron Greidinger) には、シンガーとの共通点が多くある。父親がラビであったこと、兄が作家であったこと、ワルシャワで幼少期を過ごし、1930年代にアメリカへ移住して、ニューヨークの『フォワード紙』に小説を発表していたことなどである。アーロンには、シンガー自身が投影されており、アーロンの考え方が、すなわちシンガーの考え方になっている。アーロンが、神の存在そのものではなく、神が善の源であることを否定する、「抗議の宗教 (“A Religion of Protest”）」という考え方を持つことに作家シンガーの主張が見られる。

What I mean was that one may believe in God's wisdom and deny that He is the source of goodness only. God and mercy are not absolutely synonymous."[...] "We cannot ignore God any more than we can ignore time or space or causality," I said, more to Max than to Miriam. (*Meshugah* 37)

ミリアムがアロンに、「抗議の宗教」についての作品のことをたずねたときの一節である。神が善の源でも、慈悲と同義語でもないと言っているが、神の存在は、時、宇宙、因果関係のどれよりも、無視することはできないと言ひ、力、全能は否定するも、存在は認めている。そして、シンガーも同様に、終生ユダヤ教に回帰することはなかったが、神の存在を否定することはなかった。

次に、『メシュガー』の中で、アロンの後継者を望まないという意志が窺えるところがある。ミリアムとアロンが結婚式を終え、話している場面である。

"If we have a child, we'll name him Max."

"There will be no children," I said.

"Why not?" she asked.

"You and I, we are like mules," I answered, "the last of a generation." (*Meshugah* 228)

アロンは、ミリアムに子どもができたならマックスと名付けようと言われたのに対し、子どもはいらない、自分たちが最後の世代だと答えている。そして、ひとつの世代の最後の者だということを、ミリアムとアロン自身をラバに例えて述べている。この例えは、ラバが雄ロバと雌ウマとの交配でつくられた一代雑種であり、生殖能力はないことからきている。これは、「生めよ、ふえよ、地に満ちて地を従わせよ」[「創世記」第1章28節、口語訳]という、命の源である神が人間を創造し、人間を祝福した言葉に反抗する言葉であり、アロンの神に対する、明白で断固とした抗議となっていることがわかる。そして、これは、神を信じ、メシア到来を待ち望んだとしても神に救われることがないのなら、ホロコーストを経験した負の歴史を持つ人々は、我々の世代で終わりにしようという意志であり、神に対する希望を放棄したのだろうかと考えられる。

アロンが「抗議の宗教」という考え方を示すのは、やはりホロコーストの影響であるといえる。神や教えを信じ続けていたユダヤ人であったが、ついにメシアが到来することはなかった。神に対して敬虔であった者を救わない神は善の根源ではないということである。

2. 『ショーシャ』における主人公とシンガーの神概念

シンガーの描いた『ショーシャ』(Shosha, 1979)に、『メシュガー』と同じくアーロンが同姓同名で登場する。そして、この『ショーシャ』という作品でも、アーロンとシンガーは共通する点がいくつかある。年齢が当時の自身とほぼ同じであり、ワルシャワで少年時代を過ごしたこと、ワルシャワの作家クラブに通うイディッシュ語作家であり、また、シンガーの弟と同名のアーロンの弟モイシェ、作中の弟モイシェはラビとなり、現実の弟モイシェも、母親と第二次世界大戦中に貨車でカザフスタンに連れていかれ、そこで亡くなる前までは、ラビであった父親と同じ道を目指していたことなど、シンガーの人生がアーロンの人生にそのままあらわれている。この『ショーシャ』のアーロンもシンガー自身が投影されている。

『ショーシャ』においても、アーロンは神について述べている。アーロンが幼馴染のショーシャと話している場面である。

“No, Shoshele¹, I believe in God, but I don’t believe that He revealed Himself and told the rabbis all the little laws that they added through generations.”

“Where is God? In heaven?”

“He must be somewhere.” . . .

“God is no good?”

“Not as we see it.”

“He has no pity?”

“Not as we understand it.” (Shosha 205)

この場面では、アーロンがショーシャに神についての自身の考えを述べている。アーロンは、神はどこかに存在するも、哀れみもなく善意もない存在であると考えている。

また、アーロンの抗議の宗教の態度がみられる所がある。

I was overcome by a rage against creation, God, nature – whatever this wretchedness was called. I felt that the only way of protesting cosmic violence was to reject life, even if I had to take Shosha with me. (Shosha 114)

この場面で、アーロンは宇宙の横暴さに反抗する唯一の方法は生を拒絶することだと言っている。生を生み出す神に対する生きることへの拒否は、アーロンの最大級の神への抗議と言える。

そして、生を拒絶する方法とは違ったかたちで、アーロンの神に対する反抗的な態度がみられる場面がある。その場面とは、アーロンが菜食主義者になろうと誓うところである。

The menu didn't feature a single dish that wasn't fish or meat, and I had just vowed to become a vegetarian.”[...] “The vegetarian only express a protest. (*Shosha* 80)

ここで、アーロンは、菜食主義者になることを誓い、菜食主義者だけが抗議を表現できるのだと述べている。肉も魚も食べるという神が創りあげた世界に抗いながら、生きることを表明しているのである。野菜だけを食べ、肉、魚を食べることを拒否することで、神に反抗している。ここでも、アーロンの神に対する反抗心がみられる。

また、『メシュガー』のアーロンと同様に『ショーシャ』のアーロンも子どもはいらなという意志を持っていることが窺える場面がある。『ショーシャ』においてベティ (Betty) と話している場面である。

“Well, you'll fall into a net you'll never be able to unnable yourself from. I don't even believe that such a woman is capable of living with a man. She surely can't have a child.”

“I don't need children.” (*Shosha* 78-79)

ベティがショーシャのことを、子どもを産める人ではないと言った時、アーロンは、子どもは必要ないと答えた。

『ショーシャ』のアーロンは『メシュガー』のアーロンと考え方が類似しており、『ショーシャ』のアーロンにもシンガーの考え方が投影されているとわかる。シンガーの宗教観は、アーロンに顕著にあらわれている。シンガーは、神の存在は信じるが、本来神の性質であるはずの神の正義、善の部分は信用していない。これは、ホロコーストの経験が影響している。神を信じ、メシア到来を待ち望んだ人々のもとに救いは来ず、大勢の人々が亡くなった。神に対し、希望を抱き、期待することの無意味さを実感したのではないかと考えられる。ユダヤ人が長年待ち望んでいたメシア到来が、幾度となくやってきた困難、過酷な試練、地獄のような現実があつたにもかかわらず、ついに果たされず、ただ負の歴史が残るだけである。また、それでも神の存在を無視することなく認めているのは、ユダヤ人の生活、文化、考え方に神の存在が根付いているからであると考えられる。

3. 『夜』の主人公にみられるエリ・ヴィーゼルの神概念との比較

シンガーの神に対する概念は、他のユダヤ系作家の概念とどのように異なるのか。ここからは、他の作家との比較もしていく。エリ・ヴィーゼル (Elie Wiesel) は、シンガーと同じユダヤ人作家であり、ホロコーストを経験し、実際にアウシュヴィッツなどの強制収容所に収容されていた経験を持つ。ヴィーゼルは、ユダヤ社会にとらわれない自由な作風を持つシンガーとは対照的なユダヤ人作家としてあげられる作家である。ヴィーゼルの『夜』(Night, 1960) は、自身のホロコースト、強制収容所での経験、記憶をもとに自伝的につづった小説である。そして、ヴィーゼルと『夜』の主人公は、同じシゲト出身であり、父と共に強制収容所で強制労働を経験したり、ブーヘンヴァルトで父を亡くしたりと、いくつか重なる点もみられる。そこから、『夜』の主人公やほかの登場人物の考えや心情をもとにヴィーゼルの神、そして、ユダヤ教に対して持っている概念や考えを読み解いていく。そして、シンガーの神概念とどのように違うのか比較し、『夜』という作品には、ホロコーストの実体験をもとに話がつづられていることから、ホロコーストの経験がどのようにして神に対する概念に影響を与えるのかについても探っていく。

『夜』の主人公、エリエゼル (Eliezer) は、トランシルヴァニアの小都市、シゲトで生まれ育つ。昼間は、シナゴーク²でタルムード³を勉強し、夜には、ゾハール⁴を読み、カバラを勉強するという、ユダヤ教の理解を深める日々であった。主人公の暮らす町の人々は、戦争の存在を認識しつつも、ロシア戦線からのドイツの敗北を思わせるニュースが流れていたこともあり、実際に、自らに被害が及ぶほどではなく、皆は希望に満ちていた。しかし、幸せな日々も束の間、やがて、主人公の住む町、シゲットにホロコーストの影が忍び寄る。ドイツ軍が町に住むようになり、町にはゲットー⁵がつくられる。ゲシュタポ⁶らによって、ゲットーから、移送され、強制収容所での過酷な労働の日々が始まる。その日々の中で、今まで培ってきた神や、ユダヤ教に対する概念が変化していく。

Never shall I forget those flames that consumed my faith forever.

Never shall I forget the nocturnal silence that deprived me for all eternity of the desire to live.

Never shall I forget those moments that murdered my God and my soul and turned my dreams to ashes.

Never shall I forget those things, even were I condemned to live as long as God Himself.

Never. (Wiesel 34)

さらに、ここでは、焼却所で大勢の人々を焼いた炎が主人公の信仰をも焼き尽くし、生きることへの欲求もなくしてしまっている。そして、主人公は、自分の信じていた神と主人公自身の魂が殺害された、今この瞬間を生涯忘れないであろうと、誓っている。今までの神と自分とのつながりを断たれ、信仰が意味を成さないことを悟る。この収容所での労働は熱心な信仰心をもくじけさせ、なくしてしまうのだということが読み取れる。

The night had passed completely. The morning star shone in the sky. I too had become a different person. The student of Talmud, the child I was, had been consumed by the flames. All that was left was a shape that resembled me. My soul had been invaded -and devoured- by a black flame. (Wiesel 37)

ここでは、主人公が自分という人間が、以前とは違う人物になってしまったのだと言っている。以前のタルムードの勉強を熱心に行っていた自分の魂は消え、残ったのは、自分自身の姿形だけだということ。ここで、徹底的に主人公の宗教観、神に対する概念が根本的に変わったところだといえる。自分が今まで培ってきたものすべてを否定的にとらえ、自らを解き放っている。これほどまでに、その人の持つ概念、考え方、さらには、人格に影響を与えるホロコーストの残酷さがいかなるものであったかを、理解することができる。

Some of the men spoke of God: His mysterious ways, the sins of the Jewish people, and the redemption to come. As for me, I had ceased to pray. I concurred with Job! I was not denying His existence, but I doubted His absolute justice. (Wiesel 45)

ここで、主人公が述べている意見は、シンガーの持つ考えと似ている。主人公は、神の存在を否定はしないが、神の絶対的な正義については、疑念を抱いている。

ヴィーゼルは、『夜』のなかでは、信仰してきたユダヤ教にも、神にも絶望し、疑念を抱くところが読み取れる。にもかかわらず、強制収容所などでの辛く厳しい経験をしていながらも、どうして神への信仰心を途絶えさせることがなかったのだろうか。ホロコースト以後、信仰心などなくなってしまうように思えるが、ヴィーゼル自身、ホロコーストの経験から自らを救ったのは、タルムードの学びであったと述べている。そのことがわかるのが、ヴィーゼルの弟子、アリエル・バーガー (Ariel Burger) という人物が書いた『エリ・ヴィーゼルの教室から 世界と本と自分の読み方を学ぶ』という本の中で、学生がヴィーゼルに、ホロコーストの後、くじけずやってこられた理由を質問され、答えてい

る一節である。

学びです。戦争が始まる前、わたしはタルムードを勉強していたのですが、それは中断せざるを得なかった。戦争が終わったあと、フランスの孤児院にたどりついたとき、わたしが最初に所望したのは読みかけたままだったタルムードと同じ巻でした。中断していた同じページの同じ行、同じ場所から学習を再開できるようにね。学びです、わたしを救ったのは。(Burger 18)

シンガーもヴィーゼルもイディッシュ語を母語とし、互いに超正統派であるハシド派の家庭に育ったにもかかわらず、こうした違いが出てくるのはホロコーストの実体験の有無であると言える。ヴィーゼルは、実際にアウシュヴィッツなどの強制収容所に収容されていた経験を持ち、ホロコーストを実体験として記憶に持つ。ヴィーゼルは、忘却からホロコーストの犠牲者を救い出すために創作しているのだと述べており、非常に限定的な創作目的を持つことがわかる。ヴィーゼルはホロコーストを生き延びたという生存者としての義務感を持ち、ホロコーストの記憶を自身の創作目的に役立てているのである。ヴィーゼルは、自身の創作目的から、作品をユダヤ人のために書いているのであり、それはユダヤ社会の不文律を守り、ユダヤの伝統や文化にのっとっていなければならないので、ヴィーゼルの作品はユダヤ社会の上に成り立っているのだと言える。そのため、ヴィーゼルの信仰心はユダヤ人であるという帰属意識からもきているのではないかと考えられる。シンガーは、ホロコースト以前にアメリカに渡っており、直接的なホロコーストの経験がなかったせいかアメリカ生まれの現代作家と同じように、ホロコーストを歴史上のひとつの出来事として客観視している。それがユダヤ社会に固執しない姿勢につながり、ひいてはユダヤ教に固執しない宗教概念につながっているのではないかと考えられる。

4. シンガーの概念を形成した家庭の環境

シンガーは、神の存在や宗教に関して、独自の概念を持っている。その概念は、どのように形成されたのか。ホロコーストの影響も大いにあるが、幼少期に関わった思想や概念によるところも大きいだろう。このことから、シンガーの周囲の環境にふれながら、彼自身の概念にどのように影響を及ぼしているのかみていきたい。

シンガーは、父母姉兄の4人の家族を持つ。シンガーは、周囲の人物に影響されて育った。特に、兄イスラエル・ヨシュア・シンガー (Israel Joshua Singer) からの影響が大きい。

い。父ピンホス・メナヘム・シンガー (Pinchos Menachem Singer) はハシド派のラビであったが、兄ヨシュアもバシェヴィスも、ハシディズム⁷的な考え方は持たなかった。兄ヨシュアは、幼い頃から、敬虔なラビである父メナヘムに、長男であるがゆえに大きな期待をよせられ、ユダヤ教に関する様々な教育を受けさせられる。それに対する反発心からか、ヨシュアは、すべての成り立ち、根源が神であるという考えは持たず、すべては、自然の流れでできているのだというリアリスティックな考え方を持つ。幾分、兄ヨシュアに影響されて育ったバシェヴィスも、神の存在は認めつつも、神が善の根源にあるという考え方は否定している。ハシド派である父メナヘムに対し、母バテシバ・シンガー (Bathsheba Singer) は、ミトナグディーム派⁸の家柄の出であった。そのため、母バテシバは、ハシディズム的な考え方は持たず、理屈的な考え方をしていた。兄ヨシュアの考え方は、この母の考え方からきているものと考えられる。兄ヨシュアからの影響を存分に受けた弟バシェヴィスではあったが、根本的な考え方は違っていた。兄ヨシュアの宗教や神に対する懐疑的な考え方とは違い、弟バシェヴィスは、神の存在を信じていた。それは、幼い頃、タルムードのみに触れ、学んだことや、ラビである父メナヘムの話をよく聞いていたことも少し影響しているものと考えられる。

結論

ここまで、シンガーの持つ独自の神概念について、3つの視点から、読み解いてきた。シンガーの考えが投影されている『メシュガー』の主人公アーロンは、神が善の源であることは否定していても、神という存在はどんなものよりも無視することのできない存在だと主張している。これと同様に、シンガーは神が善の根源であることは否定していても、神の存在を否定することはないという「抗議の宗教」という概念を見出している。そして、『メシュガー』の主人公と同姓同名である『ショーシャ』の主人公アーロンは、創造主である神に反抗した態度をとるために、自身に与えられた生命を拒絶したり、人間が肉も魚も食べるという神が創り上げた世界に反抗して、野菜だけを食べて生きる菜食主義者になったりと、ここでもシンガーの「抗議の宗教」の態度が窺える。

『夜』の作家ヴィーゼルとの比較では、それぞれの作家に、神や宗教について独自の概念があることがわかった。ヴィーゼルとシンガーは、イディッシュ語作家の中でも、正反対の存在である。ヴィーゼルは、直接的にホロコーストを体験しており、素直な信仰心を持っていた幼少期とは一変し、ホロコースト以後は、反抗的な信仰心となった。しかし、シンガーとは違い、ホロコースト以後もなお、篤い信仰心とともに、教育を通して、ユダヤ教を探究している。それに対するシンガーは、神の存在を否定することは

なくとも、終生ユダヤ教に回帰することはなかった。これは、シンガーが、ヴィーゼルのように、直接的にホロコーストに関わることもなく、ホロコースト以前にアメリカに移住していることも大きいのではないかと考えられる。

ホロコーストと同様に、家族がシンガーに与えた影響はとても大きい。シンガーは、ハシディズムのラビの息子である父メナヘムと、ミトナグディーム派のラビの娘である母バテシバという正反対の家柄の両親を持つ。これは、シンガーの持つ独自の神概念の形成に大きく影響しているといえる。

また、バシェヴィスの兄であるヨシュアは、母バテシバのリアリスティックな考え方に影響され、全ては神の創造ではなく、自然の流れでできているという考えを持っていた。兄ヨシュアの影響を受けるバシェヴィスは、幼少期にタルムードのみに触れてきたことや、父メナヘムの聞かせるオカルト的な話をよく聞いていたこともあり、神が善の根源であることは否定しつつも、神の存在は認めている。この考え方は、ハシディズムの父親と、ミトナグディーム派の母親を持つシンガーだからこそのものであるといえる。

シンガーの神概念は、神が善の根源であるという考えを否定し、神自体の存在は認めるといふ「抗議の宗教」という考え方である。そして、それはホロコーストや周囲の人々の影響が大きいということがわかった。

注

- ¹ Shoshele アーロンが呼ぶショーシャの愛称。
- ² Synagogue ユダヤ教会。
- ³ Talmud ユダヤ教の律法集。
- ⁴ Zohar 『光輝の書』モーセ五書の神秘主義的注解書。
- ⁵ Ghetto ユダヤ人居住区域。
- ⁶ Gestapo ナチスドイツの秘密警察。
- ⁷ Hasidism ハシディズム、敬虔主義。
- ⁸ Mitnagdim ヘブライ語で「ハシド派への反対派の人々」。ここでは、ユダヤ教敬虔主義に対し、反対する派の人々のことである。

引証文献

Malamud, Bernard. "The German Refugee". New York: Farrar, Straus & Giroux, 1963.

Singer, Isaac Bashevis. *Meshugah*. Trans. I.B.Singer. New York: Farrar, Straus & Giroux, 1994.

—————. *Shosha*. Penguin Books, 1979.

Wiesel, Elie. *Night*. Trans. Marion Wiesel. New York: Hill and Wang, 2006.

Wigor, Geoffrey Ed. *The New Standard Jewish Encyclopedia*. New York.

Zamir, Israel. *Journey to My Father; Isaac Bashevis Singer*. New York: Arcade Publishing, Inc., 1994.

ヴィーゼル、エリ著 『夜』 村上光彦訳 みすず書房、2010年。

大崎ふみ子著 『アイザック・B・シンガー研究 二つの世界の狭間で』 吉夏社、2010年。

———— 『国を持たない作家の文学—ユダヤ人作家アイザック・B・シンガー』 神奈川新聞社、2008年。

シンガー、アイザック、バシェヴィス著 『メシュガー』 大崎ふみ子訳 吉夏社、2016年。

———— 『ショーシャ』 大崎ふみ子 訳 吉夏社、2002年。

バーガー、アリエル著 『エリ・ヴィーゼルの教室から 世界と本と自分の読み方を学ぶ』 園部哲訳 白水社、2019年。

広瀬佳司著 『アウトサイダーを求めて』 旺史社、1991年。

———— 『ユダヤ世界に魅せられて』 彩流社、2015年。

———— 『ユダヤの記憶と伝統』 彩流社、2019年。

———— 『ジューイッシュ・コミュニティ—ユダヤ系文学の源泉と空間』 彩流社、2020年。

ながはた かなこ
永幡 可奈子